移動文学 / 比較文学者にとって「移動」とは何か

西 成彦　✉ mas-nis@nifty.com

私は通常「比較文学者」を名乗りつつ、さまざまな地域、さまざまな言語の文学を手広く扱っていますが、かといって「ポーランド文学研究者」であることを辞めたわけではないと自分では思っています。大学院に進むことに決めたのは、ヴィトルド・ゴンブローヴィッチという亡命ポーランド語作家に入れあげたからで、1970年代にポーランド文学を勉強したければ「比較文学専攻」に進むしかなかったというのが現実でした。だから、当時は、ひたすらポーランド文学を読み耽りながら、それだけで「比較文学者」を名乗るに値すると考えていました。

日本では、1980年のノーベル賞受賞詩人、チェスワフ・ミウォシュがカリフォルニア大学バークレイ校での講義を一冊にまとめた『ポーランド文学史』(未知谷、2006)が手に入りますから、詳しくはそちらを参照していただけるといいのですが、そもそも「文字文芸」の興りは、ポーランドも日本も大差ありません。日本文学が漢文学から派生して八世紀ごろに誕生したと言えるなら、ポーランド文学の場合も、そもそもはラテン文学から始まり、同じラテン文字を用いたポーランド語の著作が誕生するのは、中世末期からルネッサンス期にかけてです。ただ、その後、ポーランドは一時期広大な版図を得て、ポーランド語以外のスラブ諸語やリトアニア語を話す人々を国内にかかえこみ、また西からはイディッシュ語というゲルマン語系の言語を話すユダヤ教徒が流れこんできました。ポーランド語は、多言語国家の「公用語」あるいは「覇権的な言語」だったというわけです。

しかし、そうして栄華を誇った時期を経て、今度は「三国分割」の時代が訪れます。ポーランド語自体の使用範囲が狭まったわけでも、ポーランド文学の勢いが衰えたわけでもありませんが、この時代、ポーランド語は、「帝国の言語」としてのロシア語やドイツ語の下位に置かれ、そうした圧迫のなかで、民族ナショナリズムを支える「抵抗の言語」としての役割を果たす役まわりになりました。この時期には、国情を憂えて、フランス語圏や英語圏(あるいはスペイン語・ポルトガル語圏)に亡命(もしくは移住)するポーランド人が急増しました。その結果、「ポーランド人」を名乗りつつも、ポーランド語を手放す作家があらわれてきます。『闇の奥』や『ロード・ジム』で有名なジョーゼフ・コンラッドはその代表です。

このポーランドが、第一次世界大戦のあとに独立を回復し、第二次世界大戦期から戦後の社会主義体制期には、はなはだしく主権を踏みにじられますが、現在はＥＵに属する一ヨーロッパ国家として、言語的にも文化的にも安定的な自立を享受しています。

私はそんなポーランド文学の歴史のなか

で、二つの世界大戦にはさまれた時期、そしてその後の亡命文学をおもに研究していました。その後、研究範囲を広げ、いまでは日本とその周辺の文学についても考えたりしているのですが、それでもつねに参照項として脳裡にこびりついているのは、「ポーランド文学」なるものの多様な様態です。

第一に、≪国内マイノリティの文化・文学≫。

アイヌ語は近代的な文学を産み出さないままに来ていますし、日本の在日外国人は、日本語以外を用いた文学を花咲かせるところまで至ってはいません。これに対して、ポーランド文学の周縁を考えれば、たとえばリトアニアは、ポーランドとともにロシアに併合された後に独立を果たし、いまではリトアニア語文学も立派に確立されています。また、ポーランドの少数民族のなかで人口のほぼ10%を占めたユダヤ教徒は、イディッシュ語による膨大な作品を残したまま、その伝統を途切らすことができたのは、他でもない「ホロコースト」だけでした。そうした歴史的経緯を念頭に置くと、日本にだってアイヌ語文芸や韓国語・朝鮮語文芸が、いまからだって遅くはなく、成立する可能性があると考えたくなろうというものです。

第二に、≪国外移住者・亡命者の文芸≫。

ポーランドを離れてからも、あるいはポーランドという国家が失われてからも、ポーランド人は総じてポーランド語にしがみつきました。それこそ、ポーランド文学史では、亡命文学がポーランド文学の牽引役を果たした時代として、「ロマン主義」の時代が記憶されているほどです。しかし、そうした移住地(亡命先)で現地の文学に触れたなかからは、上に挙げたコンラッドのように、言語を切り替えて、しかしながら、ポーランドへの思いを失わない、そういったタイプ、いわば「遠隔地ナショナリズム」的な文学も徐々に誕生してきます。ですから、私の場合、「在日韓国・朝鮮人文学」を考えようとすると、同化ユダヤ人のポーランド語文学ばかりでなく、ポーランド系の移民・亡命文学のことが、いつでも脳裡にちらついてくるのです。

日本文学史は、ポーランド文学史ほどの波乱には富んでいないかもしれません。しかし、みずからを日本人と自覚しないまま、しかし日本語で書くという選択を経ながら生まれた文学は、アイヌ系、琉球＝沖縄系の日本語文学、あるいは台湾や朝鮮半島の日本語文学などの形をとり、確実に日本語文学の一角を担っていますし、「在日文学」と対をなすかのように、南北アメリカには、英語やポルトガル語・スペイン語で書かれる「日系文学」なるものが成立しています。

こうしたマイノリティの文学を、かりに

「境界横断的な文学」、あるいは、英語から借用して「ハイフン付の文学」と呼ぶとします。そうすると、日本文学史の多様さを考えるときにそうした文学を度外視することは、どう考えても誤りでしょう。それはポーランド文学史の場合も同じなのです。

さらに、第三の「境界横断的な文学」のタイプとして、日本にはラフカディオ・ハーンのように、英語を手放さないまま、しかし日本文学のエッセンスに文学表現を与えようとした作家が歴史に名前を刻んでいます。言ってみれば、≪在日外国語作家≫です。

じつは、かつてドイツ人とポーランド人がそれなりに混住していた地域からは、ギュンター・グラースやヨハネス・ボブロフスキのように、歴史的にきわめて重要なドイツ語作家が生まれました。彼らは、ドイツ語話者がポーランド語話者(ボブロフスキの場合には、リトアニア語も含みます)と生きてきた隣接関係をふり返りながら書くということを自分たちの宿命だと考えていました。私は小林勝や後藤明生ら、朝鮮生れ・朝鮮育ちの、いわゆる「引揚げ作家」の作品を読むときには、つい、これらのドイツ語作家のことを考えてしまうのです。

こうした「境界横断的な文学」に目を凝らしながら日本文学を眺める習慣を身につけていくうちに、私は自分がポーランド文学の研究から始めたことが、けっしてまわり道ではなかったと感じるのです。

そして、そうした文学を研究対象に据える際に、たいせつなのは、「言語的隣接性」に目配りすることです。ポーランド語は、国内マイノリティや分割列強、あるいは移民先の言語との「隣接関係」を生きてきました。そして、その「隣接関係」があるかぎり、その文学が何語で書かれようと、その刻印は消そうにも消せないものとなります。そして、これは日本語文学の場合でも同じなのです。アイヌ語や琉球語、あるいは植民地での台湾諸語や朝鮮語や満洲語・モンゴル語などとの「隣接関係」は、植民地文学において、打ってつけの文学的主題のひとつでした。また「在日文学」の場合、かりに「在日二世」にとってもはや「母語」が日本語に他ならないとして、しかし、彼ら彼女らにとって、「母国語」としての韓国・朝鮮語(あるいは中国語・台湾語)の重さは、本人はもとより、日本語を「母国語」と信じて疑わない人間たちにとっても、無視できるようなものではないでしょう。つまり、言語と言語の境界は地図の上にではなく、ひとりひとりのマイノリティの脳、そして心のなかに引かれている。そして、それは分断ではなく、隣接なのです。

私は日本語を「母国語」だと信じて疑わない一人ではありますが、英語を皮切りに、さまざまな「外国語」を習得するなかで、自分の言語脳がそれらの諸言語によって分割される感覚(それは時として快楽であり、時として受難でもありますが)に絶えずつきまとわれています。多和田葉子さんが「エクソフォニー」、管啓次郎さんが「オムニフォン」とおっしゃるときの感覚は、自分なりに分かるつもりです。私はそれを「言語的隣接性」の体験だと考えています。そして、そのつもりになって世界文学を見渡してみると、古今東西、そうした「言語的隣接性」に形を与えようとして、どれだけ多くの文学が書き残されてきたかが見えてくると思います。そして、グローバル化の時代、その傾向はいっそう強まっており、それは地球が「たったひとつの言語」によって均質化されるまで

(かりにそういうことがあるとして)、ずっと続くのだろうと思います。

「跨境」――目新しい言葉のように思えますが、「境界横断」、「隣接」、そういったタームと並んで、まさに「またぐ」という身体的な行動を想起させるこの言葉が、いずれは、これからの「世界文学」のみならず、「文学研究」の方向性を象徴的に指し示す言葉になっていくのかもしれません。

私は「比較文学者」として自分の研究スタイルを「移動文学」と自称しています。移民や難民や亡命者の文学が前面に押し出されてきた20世紀の文学を「移動の文学」と呼んで定義づけることは、重要なことですが、そのときに自分もまた「視点の移動」を方法として用いないと、その実態は捉えられない。カフカもベケットもゴンブローヴィッチもバシェヴィス・シンガーも、あるいは李恢成も金石範も「移動の文学」ですが、それらの作品のあいだを行ったり来たりするのが「移動文学」の真骨頂だと思っているのです。

西成彦 Masahiko NISHI

(日本)立命館大学大学院先端総合学術研究科。教授。比較文学、ポーランド文学、マイノリティ文学。
『胸さわぎの鷗外』(京都：人文書院，2013)、『エクストラテリトリアル / 移動文学論 II』(東京：作品社，2008)、『森のゲリラ 宮澤賢治』(東京：岩波書店，1997 / 東京：平凡社，2004)、『ラフカディオ・ハーンの耳』(東京：岩波書店，1993)。